

Q23can-do リストはどのように
作られ、検証されたのか



CEFR-JのCAN-DOリストはどのように
に作られたのか

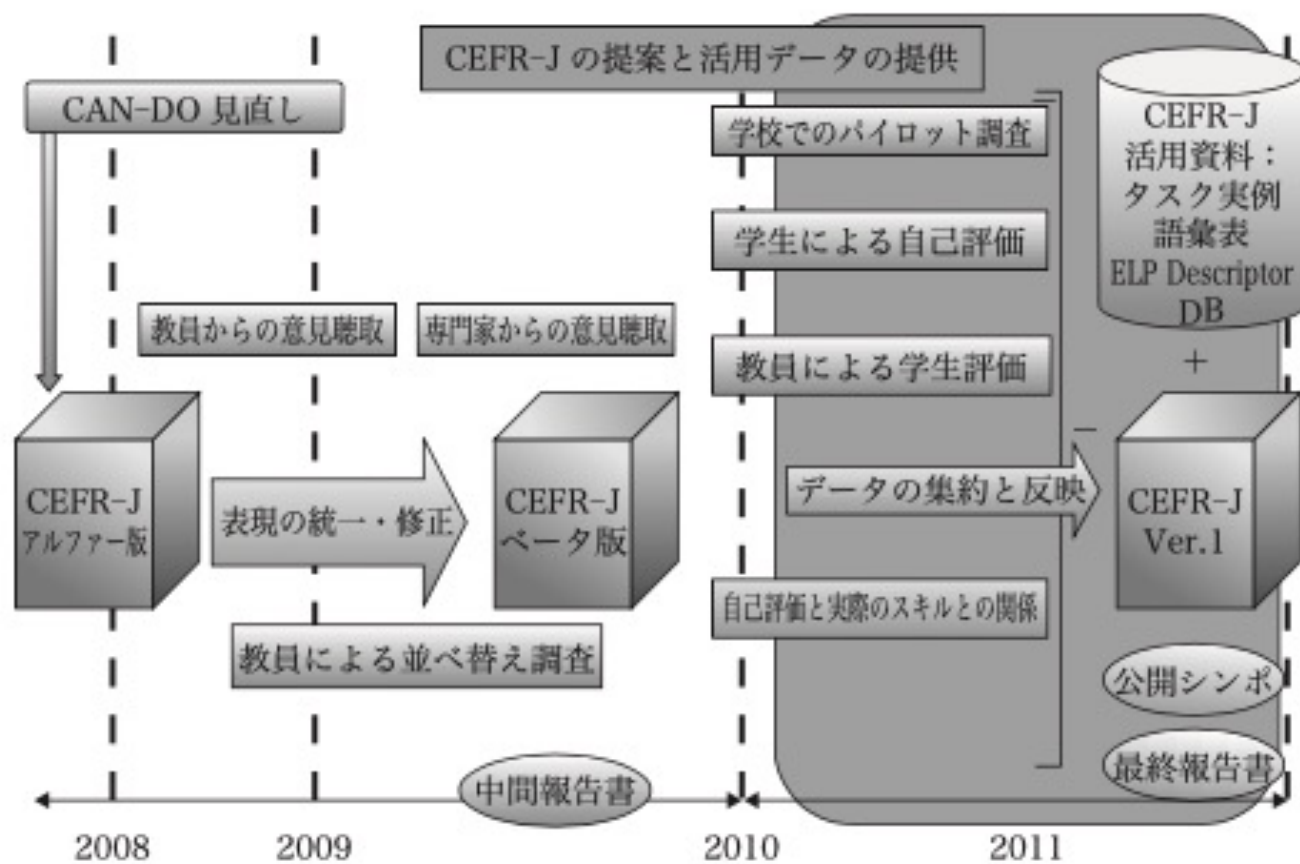


図 1 : CEFR-J の CAN-DO リストの作成過程

一. CEFR-JのCAN-DOリストはどのように作られたのか

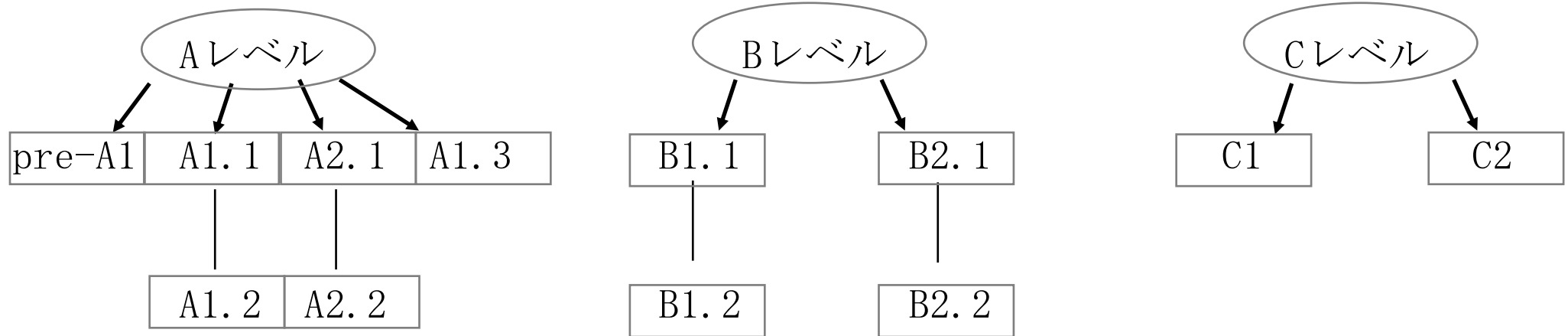
- 
-
- 日本人英語学習者のCEFRレベルを知る

8割程度はAレベル、2割程度はBレベル、Cレベルはほとんどいない

- CEFRディスクリプタが日本人英語学習者に対して適用できるか
適用はほぼ可能なものの、若干の修正が必要である

一. CEFR-JのCAN-DOリストはどのように作られたのか

結果--CEFR-Jのレベル



CEFR-Jのアルファ版

参照：CEFR、ELP、GTEC for student、
英検、SEL-Hi校のcan-doディスクリプタ

日本の英語教師と海外のCEFRの専門家
(Dr. Tony Green) のコメントの中、最も
も有益であった観点：

- 発表技能

(spoken interaction、spoken production、writing)

1 task (performance)

2 content (condition)

3 quality (criteria)

- 受容技能

(listening, reading)

1 task

2 condition

3 text

「B2. 2聞くこと」

非母語話者への配慮としての言語的な調整がなされていなくても、母語話者同志の多様な会話の流れ（テレビ、映画など）についていくことができる

text	condition	task
母語話者同志の多様な会話の流れ（テレビ、映画など）	非母語話者への配慮としての言語的な調整がなされていなくても	会話の流れ（テレビ、映画など）についていくことができる

CEFR-JのCAN-DOリストはどのように
に検証されたのか？

二. CEFR-JのCAN-DOリストはどのように検証されたのか？

(ベータ版)

- 1 教員による並べ替え調査 (Q21参照)
- 2 学校でのパイロット調査
- 3 学生による自己評価 (Q22参照)
- 4 教員による学生評価
- 5 自己評価と実際のスキルとの関係. (Q33. 35. 37. 39参照)

二(1). 学生による自己評価

1. CAN-DOディスクリプタに基づく学生自己評価アンケート

人数:5468名(中学生1685名、高校生2538名、大学生1245名)

*CEFRのCAN-DOディスクリプタの尺度作成:教員による学生評価

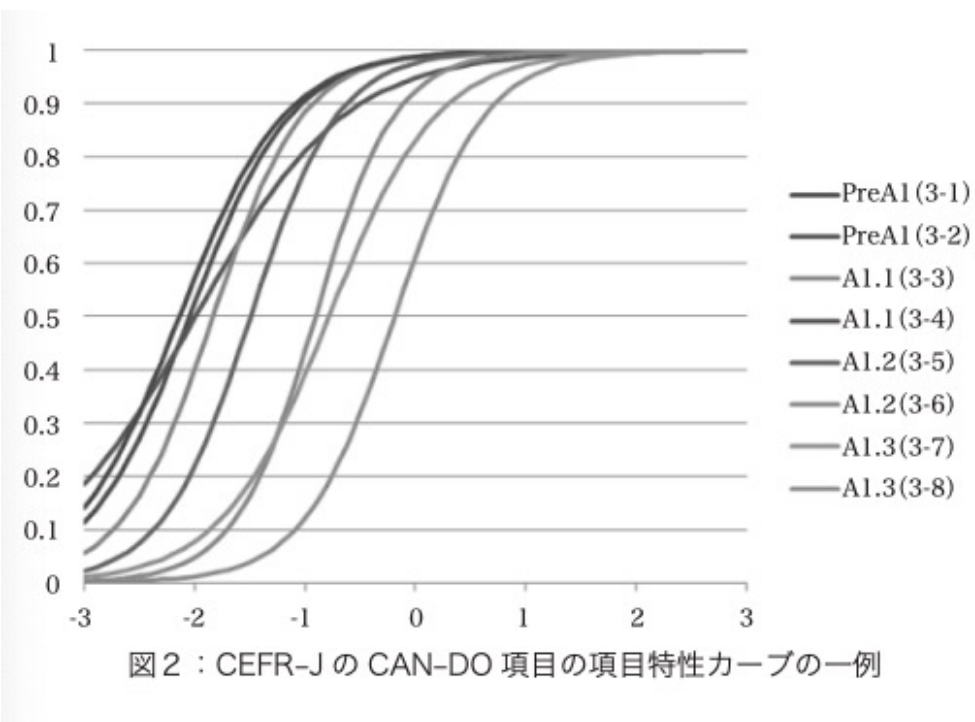
日本の場合:学生の自己評価データに基づく

二(1). 学生による自己評価

2. 項目応答理論による項目分析

表 1 : CEFR-J の CAN-DO 項目の識別力と項目困難度の表の一例

レベル	項目番号	回答率	正答率	標準偏差	識別力	困難度
Pre-A1	3-1	0.998	0.859	0.348	1.529	-1.879
Pre-A2	3-2	0.994	0.786	0.411	1.135	-1.509
A1.1	3-3	0.990	0.865	0.342	2.199	-1.720
A1.1	3-4	0.990	0.880	0.325	1.738	-1.991
A1.2	3-5	0.982	0.859	0.349	2.247	-1.661
A1.2	3-6	0.985	0.783	0.413	2.224	-1.132
A1.3	3-7	0.978	0.588	0.492	2.299	-0.181
A1.3	3-8	0.981	0.701	0.458	1.746	-0.750



二(1). 学生による自己評価

3. 分析結果

- 全体的

多くの項目は計画通り

- 「異常な」項目

→ それぞれ技能のいくつ

新しく枝分かれしたレベルの項目（聞く：A1.3~B1.1の8項目、発表：A1.2~A2.2）

二(1). 学生による自己評価

4. 問題と解決方法

- 困難度判断とのずれ

問題：ある部分の項目に関する学習者の困難度判断は、予想とは必ずしも一致しなかった

方法：項目困難度の通りにディスクリプタを並べ替えた

- ディスクリプタの記述形式

問題：レベルの異なるディスクリプタに「条件」の繰り返しがあり、質問紙票の元となった日本語版ではこの条件がディスクリプタの先頭に来ていたために、それらのディスクリプタがみな同じレベルにあるという印象を学習者に与えてしまった。

方法：日本語版では、日本語のディスクリプタが不自然にならない限り、条件の部分をディスクリプタの真ん中に移動した。

二(1). 学生による自己評価

4. 問題と解決方法

- 経験の有無

問題：学習者が経験したことのないCAN-DOディスクリプタは、想定より難しいと判断された

方法：学習者にとって馴染みのない要素を排除した

例：読むこと——A1.2

「ベータ版」非常に短い簡単な手紙や葉書、メール



「Version1」携帯メール

- 用語の扱い

問題：専門的な「CEFR用語」から成るCAN-DOディスクリプタは難しいと判断された

方法：専門用語の使用を避けた

例：やりとり——preA1

「ベータ版」差し迫った必要性のある領域



「Version1」 「助けて」、「～が欲しい」など

二(1). 学生による自己評価

4. 問題と解決方法

- 想定するタスクの難易度

問題：CAN-DOディスクリプタは、広範囲のタスクを含む可能性があり、学習者が想像するタスクはそれらのディスクリプタの書き手が想定していたタスクより、難しかったり、易しかったりした。

方法：例を入れることで、解釈の幅を狭めた。ただし、英語の実例の挿入は、下のレベルのディスクリプタでのみ可能だった。

例：「ベータ版」道案内をすること 「Version1」 「右に曲がって」 「まっすぐ行って」などの基本的表現

- タスク遂行条件

問題：いくつかのディスクリプタは、タスクの遂行条件のために、学習者は想定より易しいと判断したり、難しいと判断したりした。

方法：必要に応じて、条件を追加したり、削除したりした。